

# コロナ禍でのコミュニケーションを支援する

～日常生活に生きる ICT 機器を活用した合理的配慮～

企画者	石飛 了一	（筑波大学附属大塚特別支援学校）
	是枝 喜代治	（東洋大学ライフデザイン学部）
	生田 茂	（大妻女子大学人間生活文化研究所）
司会者	石飛 了一	（筑波大学附属大塚特別支援学校）
	是枝 喜代治	（東洋大学ライフデザイン学部）
話題提供者	松岡 那奈	（広島県立福山特別支援学校）
	高垣 有	（広島県立福山北特別支援学校）
	曾根 玲子	（福岡県立太宰府特別支援学校）
指定討論者	菅野 和恵	（東海大学健康学部）

KEY WORDS: ICT 機器の活用, 手作り教材, コミュニケーション支援

## 【企画趣旨】

これまで、本企画では、大学の附属学校や公立の特別支援学校等の学校現場における手作り教材の制作と教育実践、特別支援教育コーディネーターと巡回相談先の学校の教師との共同の取り組み、ドットコードシステムの開発業者による最新の開発状況と推奨される活用事例などの有効な手立ての紹介などを行い、「どのような障害を持った児童生徒に、どのような手作り教材を作成し、どう取り組むべきなのか」、その効果的な支援のあり方について議論を続けてきた。本企画では、全国で取り組まれている最新の実践に学びながら、改めて、「児童生徒一人ひとりの抱える困り感を軽減し、解消する取り組みのあり方」を真摯に見つめるものとする。

## 【話題提供者の趣旨】

### 1) 「表出方法の幅を広げる」ことを目的とした音声ペンの活用の取組～社会参加を目指して～

（広島県立福山特別支援学校 松岡 那奈）

知的障害と肢体不自由を併せ有する中学部 3 年生の生徒を対象に、音声ペン（G-Speak）を活用した実践である。生徒 A は、福山型先天性筋ジストロフィーを有しており、コミュニケーションにおいては、簡単なやりとりはできるが、場面緘黙の傾向にある。慣れない場面では、自分の発言に自信が持てず、口形のみや小声で答えたり、固まったりすることが多かった。そこで、どのような場面においても、表出方法の幅を広げることを目的とし、音声ペンを活用した。音声ペンを活用することで、自信を持って司会を行うことができたり、ひらがなボードとの併用を通して、ひらがなをかたまりとして認識することができ、出来事を簡単な文で入力して表出したりすることができた。これは本人の今後における社会参加への大きな一歩にも繋がったと考えられる。

### 2) 「一人でできることを増やす」ための音声ペンの活用の取組（広島県立福山北特別支援学校 高垣 有）

知的障害と肢体不自由を併せ有する中学部 1 年生を対象に、音声ペン（G-Speak）を活用した実践である。生徒の実態から課題関連図を作成し、中心課題「（心理的な安定）一人でやることに自信がない。」を導き出し、指導目標を「一人でできることを増やす。」とした。一人で何かをする経験を通して、自信につなげていくことを目的とし、①朝の会の司会進行、②絵本を読む活動、③インタビュー活動の各場面において実施した。3 つの実践から、自分で考えて意識して行動する力や、因果関係の理解やコミュニケーションスキルの向上が見られた。一方で、音声ペンをかざす動きが難しい等「一人でやること」については継続課題である。また手元

を見続けることは難しく、支援の工夫を検討していく必要がある。生徒は音声ペンに対して意欲的であるため、自分の行動で何かができる等の経験を多く積むことで、自信を持って取り組めることを増やしていきたい。

### 3) 音声ペンを介した指差しと音声の表出（福岡県立太宰府特別支援学校 曾根 玲子）

音声ペンを用いた実践を通して、発語のない児童が指差しと音声で、教師に離れてほしい意思を表出できるようになった事例を取り上げる。対象児は発語がなく、音声を発することも少ない児童である。1 学期から、朝の会・帰りの会の司会を、教師の支援を受けながら、音声ペンを用いて行った。めくり式の朝の会・帰りの会ボードに、音声ペン用のシールを貼っておき、対象児が音声ペンでそのシールをタッチして司会を行った。2 学期までは、1 枚のシールを 1 回だけタッチすることができていたが、3 学期になると、1 枚のシールを 2 回連続でタッチすることにこだわり、止めようすると、遠くの方を指差したり「ばばば」と言ったりして、教師を遠ざけようとするようになった。その後、音声模倣をしようとする様子が見られるようになり、教師の「あっち」という言葉を模倣し、遠くの方を指差しながら「あぺびび」「あばぺい」など言うことができた。この事例を基に、ICT 機器の教育的効果について検討したい。

## 【指定討論者の趣旨】

日常生活に ICT 機器を取り入れることは、自己表現の機会を広げ、その意欲を高めることにつながる。子どもの発達に焦点をあてると、対人関係（関係性の広がりや深まり）、自己理解（自己肯定感）、社会性（集団活動への積極性、参加意欲、活動範囲の拡大）、言語発達（語彙の増加、発話意識）などに影響を与えている。ICT 機器の活用は、自律性・自発性を育てることの後押しとなり、教育実践の効果は大きい。本シンポジウムでは、全国の先生方の音声ペンと手作り教材による実践を共有し、ICT 機器を活用した支援の可能性について、議論する。

## 付記

本報告は、本人あるいは保護者、所属機関等の許可を得て掲載しています。また、各学校における実践は、JSPS 科研費 JP16K04844（代表：大妻女子大学 生田茂）などのお世話になっています。

(ISHITOBI Ryoichi, KOREEDA Kiyoji, IKUTA Shigeru, MATSUOKA Nana, TAKAGAKI Yu, SONE Reiko, KANNO Kazue)